

PRO の先行詞と θ 役割に関する覚え書*

登 田 龍 彦

A Note on Controller and θ -role

Tatsuhiko TODA

1

CHOMSKY (1981) で提唱された統率 (government) と束縛 (binding) の理論 (以下 GB 理論と略す) の枠組では, 代名詞的照応形 (pronominal anaphora PRO) について三つの基本的な問題があると言われている。すなわち, i) PRO はどこに現れるか, ii) PRO はどこに現れなければならないか, iii) PRO の指示はどのように決定されるか, というものである。i)-iii) の問題はそれぞれ i) 統率と束縛の理論の一般原則, ii) 投射の原則 (projection principle) と格理論 (case theory), iii) 統制理論 (control theory) に依って説明されると仮定されている。本稿で問題にするのは, 上記の問題 i)-iii) と密接に関係する PRO の先行詞 (すなわち統制子 (controller)) の特徴である。CHOMSKY (1981: 321) は, 空範疇 (empty category) の痕跡 (trace) と PRO を比較し, それらの特徴の相異を次のように主張している。

- (1) Two types of such empty categories have been considered: trace and PRO. Each of these has a certain cluster of properties: trace is properly governed and bounded by subjacency, and it transmits rather than retaining θ -role (i. e., its antecedent has no independent θ -role); PRO is ungoverned and not necessarily bounded, and does not transmit θ -role (i. e., its antecedent, if it has one, has an independent θ -role). (点線筆者, 以下同様)

(1)を要約すると, i) 痕跡は統率されるが, PRO は統率されない。ii) 痕跡は下接の条件 (subjacency condition) に従うが, PRO は従わない。iii) 痕跡の先行詞は独自の θ 役割 (θ (=theta)-role) を持たないが, PRO の先行詞は独自の θ 役割を持つ, ということである。本稿では, PRO の先行詞は独自の θ 役割を持つという第三番目の主張に焦点をあて, その妥当性を CHOMSKY の最近の研究を踏まえて検討してみたい。¹⁾

2

まず, 本稿で問題となる概念を CHOMSKY (1981) に従って定義しておこう。PRO というのは, (2) に示すように統率されない (ungoverned) 位置に生起する潜在的な主語を指す。

- (2) a. John tried [PRO to win].
b. [PRO finishing my work on time] is important to me.

c. [PRO looking up], I saw him come in.

CHOMSKY (1981: 165) は統率を次のように定義している。

- (3) $[\beta \dots \gamma \dots \alpha \dots \gamma]$ において, (a) $\alpha = X^0$ で, (b) ϕ はある最大投射 (maximal projection) で, ϕ は γ を支配すると同時に α も支配し, (c) α が γ を c 統御 (c-command) するなら, α は γ を統率する。

大ざっぱな言い方をすれば, 主語が統率されるためには, [+tense] の時制辞 (INFL=inflection) が必要とされるので, [-tense] の素姓を持つ不定詞節, 動名詞節, 分詞節等の主語は統率されないことになる。²⁾

θ 役割とは, 項 (argument) (すなわち, 何らかの指示機能 (referential function) を持ち得る表現で, 名称 (name), 再帰代名詞, 相互代名詞 each other 等の照応表現 (anaphor), 代名詞等) が文中で果している行為者 (agent), 主題 (theme), 着点 (goal) というような意味的な役割のことを指す。項が文中で占める種々な位置の中で, 述語の下位範疇化 (subcategorization) に関与するような θ 役割を持った位置を θ 位置 (θ position) という。COMP や VP の右端のような付加部 (adjunct) は常に θ 役割を持たない $\bar{\theta}$ 位置 (non- θ position) であるが, 主語の位置は θ 位置であることも $\bar{\theta}$ 位置であることもある。³⁾ 主語は直接的には厳密下位範疇化 (strict subcategorization) には係わらないが, VP に依って間接的に θ 役割を付与される。が, (4) のような seem, be certain, 受身過去分詞等を含む VP は主語に θ 役割を付与することはできず, その主語には θ 役割を持たない非項 (non-argument) (例えば, イディオムの切れ端 (idiom chunk), 形式語 it, 存在の there 等) がくると仮定されている。⁴⁾

- (4) a. Too much has been made of this problem.
 b. It seems (is certain) that John left.
 c. There are believed to be unicorns in the garden.

一般的に, 空範疇のうち PRO と痕跡とはその先行詞が θ 位置を占めているか $\bar{\theta}$ 位置を占めているかに基づいて区別されると言われている。⁵⁾ が, (1) の点線部分でも示されているように, PRO の先行詞は常に「 θ 位置にある」というよりはむしろ「独自の θ 役割を持つ」という表現の方が適切であるように思われる。何故なら, (5) と (6) において, PRO の先行詞は $\bar{\theta}$ 位置の主語 John であり, John はその痕跡 t から受動者 (patient) という θ 役割を受け継いでいるからである。⁶⁾

- (5) after PRO reading, John was shot t
 (6) a. John was kidnapped, shaving himself.
 b. *They kidnapped John, shaving himself.

以上のことを踏まえて, 次節では CHOMSKY (1981) の主張(7)の検討を行なってみよう。

- (7) PRO の先行詞は独自の θ 役割を持つ。

3

具体的な検討の前に, もう少し詳しく θ 役割の付与の仕組を述べる必要がある。CHOMSKY (1981: 36-8) は(8)のような構造において, 語彙的範疇 (lexical category) α は, β (名詞句や節) の文法機能 (grammatical function) と α の語彙項目エントリーに盛り込まれている意味情報に基づ

いて β に θ 役割を付与すると論じている。

- (8) a. [γ ... α ... β ...]
 b. [γ ... β ... α ...]

(8)において、 α と β は γ の直接構成素 (immediate constituent) で、 $\gamma = \overline{\alpha}(\overline{\alpha}$ は \overline{X} 理論における α の主要部 (head) で、 β は α の補助部 (complement) の一つということになる。但し、既述したように、 θ 役割は厳密下位範疇化に関与しない主語にもVPに依って間接的に付与されると主張されている。⁷⁾

さて、(9)では全てのPROの(イタリックスで示してある)先行詞は θ 位置にあり、独自の θ 役割を持っているが、⁸⁾

- (9) a. *John* promised *Mary* [PRO to shave himself/*herself].
 b. *John* told *Mary* [how PRO to defend herself/*himself].
 c. *John* told *Mary* [that it would be inappropriate [PRO to perjure himself/herself]].

(10)の例文についてはどうであろうか。

- (10) a. Depending on the nature of the verb, PRO is controlled either by the complement of the verb or by its subject. (CHOMSKY 1981: 75)
 b. The former interpretation is forced if we replaced *Bill* by *them*, a fact that reduces to disjoint reference if we assume a PRO subject, in which case this same PRO subject will be subject of *help* in the former sentence, satisfying the θ -criterion. (CHOMSKY 1981: 139)
 c. I'll help you if necessary. (QUIRK et al 1985: 1122)
 d. Unknown to his closest advisers, he had secretly negotiated with an enemy emissary. (QUIRK et al 1985: 1122)
 e. He rose and stood a moment clutching the window-still, to give him a sense of reality again; ... ——GALSWORTHY (OHYE 1983: 181)

点線を施されている語句の直前の位置は統率されていないので、PROが存在しなくてはならない。これらのPROの先行詞は、(a)、(d)では後続する主節、(b)、(c)、(e)では先行する直前の(主)節である(特に、(e)においてPROの現れる節ではhimselfでなくてhimとなっていることに注意)。CHOMSKY(1981)のGB理論における θ 役割は、項の文中で果している意味的役割であるので、PROの先行詞として解釈される(主)節は θ 役割を付与する語彙的な範疇の主要部がないため、何れも項として機能せず、 θ 役割を持ってない。従って、PROの先行詞が(主)節それ自身である場合は、CHOMSKY(1981)の主張(7)は強過ぎることになる。

更に、PROの先行詞が文脈・場面から判定される(11)–(13)の場合も若干の問題が生じる。

- (11) a. Putting it mildly, you have caused us some in-convenience.
 b. His moral principles, to be frank, begin and end with hid own interests.
 c. To say the least, their techniques are old-fashioned.
 (12) a. When dinning in the restaurant, a jacket and tie are required.
 b. To borrow books from this library, it is necessary to register as a member of the library.
 (13) To check on the reliability of the first experiment, the experiment was

replicated with a second set of subjects. (以上 QUIRK et al 1985: 1122-3)

(11)では、PROの先行詞はいわゆる遂行節(performative clause)(たとえば、I TELL you)の主語I、(12)では、不定代名詞のone、形式ばった科学的書記言語の(13)では、著者(あるいは読者のI, we, you)等である。(11)において遂行分析を認めれば、先行詞Iは主語の位置にあるので θ 役割を持つことができる。が、(12)、(13)の場合の先行詞は θ 役割を持ち得ない。もし、(1)における「PROが先行詞を持つならば」(if it has one)という条件を、文内に先行詞が顕現している場合と解すれば、(11)–(13)は主張(7)の反例とはならない。換言すれば、CHOMSKYのGB理論は文文法(sentence grammar)に属するものであるから、(11)–(13)のPROの先行詞に係わる問題は文文法で処理されるべきものではなく、語用論(pragmatics)や談話文法(discourse grammar)の領域に入ってくるということである。このことは、PROが付加部に現れている(11)–(13)の場合に限られるのではなくて、いわゆる動詞的動名詞(active gerund)が主節の主語にある場合も同様の扱いを受けると思われる。

(14) Trapping muskrats bothers Mary.

a. ... she thinks it's not feminine.

b. ... she is circulating a petition to make it illegal. (Thompson 1973)

(14)に(a)でなく(b)が付加されると、動名詞の主語はMaryではなくて不定代名詞のoneである。いずれにせよ、PROの先行詞は独自の θ 役割を持つという主張が(11)–(14)の場合に適用可能であるかどうかは問題が残ると思われる。

最後に問題としたいのは、CHOMSKY (1981: 323-325)が天候のitは形式語のitや存在のthereと異なり、PROの先行詞になり得ると主張していることである。

(15) It sometimes rains after PRO snowing.

CHOMSKYはPROの先行詞は普通指示的(referential)であることから、項を潜在的に指示機能を持つ真の項(true argument)と天候のitのようにこの機能を持たない(と仮定している)擬似項(quasi-argument)の二種類に分類し、後者にも θ 役割が付与されると仮定している。このことは、CHOMSKYの引用している(16)の例から分かるように、snowのような天候の動詞(weather-verb)の主語は天候のitが主節にある場合を除いてはPROになり得ないという事実から来ている。

(16) a. I want [it /*PRO to snow].

b. [For it /*PRO to snow all day] would be a nuisance.

c. [Its /*PRO snowing all day] would be a nuisance.

d. [It /*PRO having snowed all day], I decided to stay home.

問題は、CHOMSKYが天候のitを指示機能を持たないと仮定している点である。BOLINGER (1977: 77-87)も指摘しているように、もし天候のitが言語外の環境を指示する機能を持つのであれば、疑似項というその場限りの(ad hoc)の概念は不必要となり、天候のitもいわゆる真の項として考えてよいことになる(天候のitがPROの先行詞になり得るということは、それが指示機能を持つということを示しているとも言えるのではないだろうか)。

上述の議論から明らかかなように、PROの先行詞として文をとる(10)の場合がCHOMSKY (1981)の主張に(7)にとって一番問題になる。次節では、CHOMSKY (1986 a, b)の研究も踏まえて、先行詞としての文に θ 役割を付与する可能性を探ることとする。

4

CHOMSKY (1981: 36) は θ 位置として(17)の [] で囲まれた位置を挙げている。

- (17) a. [They] persuaded [John] [that [he] should leave].
 b. [We] hold [that [these truths] are [self-evident]].
 c. [We] hold [[these truths] to be [self-evident]].
 d. It is held [that [these truths] are [self-evident]].
 e. These truths are held [[t] to be [self-evident]].
 f. [These truths] are [self-evident].
 g. [We] put [the books] [on [the table]].
 h. The books were put [t] [on [the table]].
 i. Advantage was taken t of [Bill].

(17)で注意すべきことは、括弧付けられた表現は全て \bar{X} 理論における最大投射、すなわち NP, \bar{S} , AP, PP である (CHOMSKY 1981: 138, n. 13)。つまり、 θ 位置に来る (すなわち θ 役割を持つ) ことのできる範疇は最大投射でなくてはならない。これは、(8)においては α は β の主要部であり、 β は α の補助部であることから導き出される。が、興味深いことには、この最大投射という概念の定義は CHOMSKY (1986a, b) において修正されている。 \bar{X} 理論は(18)のように規定され、語彙的範疇の最大投射である $NP = \bar{N}$, $VP = \bar{V}$, $PP = \bar{P}$, $AP = \bar{A}$ に加えて、従来の S や \bar{S} 範疇も非語彙的範疇 (non-lexical category) $INFL (=I)$ や $COMP (=C)$ を主要部とした最大投射 $IP = \bar{I}$, $CP = \bar{C}$ であるとして捉えられている。⁹⁾

- (18) a. $\bar{X} = X \bar{X}^*$
 b. $\bar{X} = \bar{X}^* X$

従って、従来の S と \bar{S} はそれぞれ概略(19a)と(19b)の構造を持つことになる。

- (19) a. $S = \bar{I} = [NP[i \ INFL[V_P V \dots]]]$
 b. $\bar{S} = \bar{C} = [\dots [\bar{c} \ C \ \bar{I}]]$

他方、 θ 役割付与の構造条件は基本的には CHOMSKY (1986b: 14) においても保持され、厳密下位範疇化に関する直接的な θ 役割付与は(20)のように定義されている。

- (20) α は β と姉妹 (sister) 関係にある時にのみ β を直接的に θ 標示 (θ -mark) する。

例えば、動詞の目的語は主要部である動詞に依って θ 役割を付与される。更に興味深いことには、動詞句 VP は非語彙的範疇の主要部 INFL に依って役割を付与されると仮定されていることである。また、主語の θ 役割は、CHOMSKY (1981) の考え方では VP に依って間接的に付与されたが、CHOMSKY (1986a) の分析においては、 \bar{INFL} に依って付与されると主張されている。要するに、 θ 役割を付与する範疇は CHOMSKY (1981) の GB 理論では V, VP のような語彙的範疇のみであったのに対して、CHOMSKY (1986a, b) 理論では、 \bar{INFL} のような非語彙的範疇にも拡大されている。

本稿では、更に一歩進んで、非語彙的範疇の COMP にも θ 役割付与の資格を与え、(21)を提案する。

(2) COMP は INFL を θ 標示する。

CHOMSKY (1986a, b) の理論において、INFL, INFL 等の非語彙的範疇にまで θ 標示の資格が与えられたのであれば、COMP にもその資格が与えられても理論上自然なもののように思える。COMP は補部として INFL (=S) を取る主要部であるので、基本的には V が NP を θ 標示するのと同様に、COMP は INFL を θ 標示する。

さて、問題の PRO の先行詞としての主節の COMP は空 (null) で補文標識が顕現することはないが、本稿は、CHOMSKY and LASNIK (1977:456) の意味でのゼロ形態素 (zero morpheme ϕ) が COMP 内に存在すると仮定する。従って、主節は IP ではなくて CP の構造を持つことになる。(2) によって、主節の IP は COMP から θ 役割を付与されるので、主節が PRO の先行詞であると言う場合、厳密に言えば、その先行詞は節全体の CP でなくて、 θ 役割を持つ IP ということになる。¹⁰⁾ 残る問題は、IP にどのような θ 役割が付与されるかということである。現在のところ、筆者は明確な答を持ちあわせていないが、命題 (proposition) とでも呼べるような θ 役割を IP は付与されると仮定しておく。¹¹⁾

以上の議論が正しければ、問題の(10)における PRO の先行詞となる(主)節も独自の θ 役割を持ち、(7)を満足する。その結果、痕跡と PRO は少なくとも θ 役割に関して明確な対立を保持することになる。

5

本稿では以下のことを行なった。

- i) PRO の先行詞は独自の θ 役割を持つという CHOMSKY (1981) の GB 理論の主張は、主節が PRO の先行詞として選ばれる場合はその主節への θ 役割付与が不可能であるので、強過ぎることを指摘した。
- ii) 主節に θ 役割 (例えば「命題」という役割) を付与するために、CHOMSKY (1986a, b) の理論の枠組で COMP は INFL (=S) に θ 役割を付与するという代案を提示した。

以上の議論から、CHOMSKY (1986a, b) での GB 理論の修正は、少なくとも θ 役割付与に関する言語事実に対して、より一般性の高い説明を与える可能性があるという点で発展的変化であることが明らかになった。

注

* 草稿の段階で阿部幸一氏から貴重なコメントを頂戴した。記して感謝の意を表したい。尚、拙稿に残っている不備は筆者自身のものである。

- 1) 注目すべきことは、CHOMSKY (1981) の PRO と痕跡の分析に異議を唱える BOUCHARD (1984) の分析においても、PRO と痕跡の先行詞は独自の θ 役割の有無の点で異なるという CHOMSKY の主張は保持されている。詳細は BOUCHARD (1984:203) 参照。
- 2) 主語に PRO が来る節には他に i) のような INFL と連結詞 (copula) を欠く小節 (small clause) がある。
 - i) John left the room [PRO angry].
- 3) 中島 (1984:54) 参照。

- 4) CHOMSKY (1981:35) 参照.
- 5) BOUCHARD (1984:203) と中島 (1984:58) 参照.
- 6) (5)と(6)はそれぞれ CHOMSKY (1981:344, n. 2) と KIKUCHI (1983:44) からの借用である.
- 7) 荒木他 (1982:192-3) 参照.
- 8) (9)は NISHIGAUCHI (1984) からの借用である.
- 9) (10)において, X , \bar{X} , $\overline{\bar{X}}$ の順序はパラメーターの値に依って決定され, $\overline{\bar{X}}$ *はゼロを含む任意の生起を表す. 詳細は今西 (1986:62) 参照.
- 10) 例えば, (10b)の *satisfying* の前にある PRO の先行詞は直前の 'this same ... sentence'の部分であって, 'in which case'はその先行詞の一部でないということを意味している.
- 11) ある要素への θ 役割付与にはその要素が格 (case) を持つことが前提とされるならば (cf. CHOMSKY 1986a:94), 更に主節への格付与の問題が生じるが, この問題については別の機会に譲りたい.

参考文献

- ARAKI, K. (荒木一雄), J. WATANABE (渡辺淳一), M. AMANO (天野政千代), S. OSHIMA (大島新), H. IIDA (飯田秀敏), and T. KAGEYAMA (影山太郎). 1982. 『文法論』 Tokyo: Kenkyu-sha.
- BOLINGER, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- BOUCHARD, D. 1984. *On the Content of Empty Categories*. Dordrecht: Foris Publications.
- CHOMSKY, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.
- . 1986a. *Knowledge of Language*. New York: Praeger Publishers.
- . 1986b. *Barriers*. Cambridge: MIT Press.
- CHOMSKY, N. and H. LASNIK. 1977. "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, pp. 425-504.
- IMANISHI, N. (今西典子). 1986. 「基底部門の諸問題 (1)」『英語青年』132, pp. 62-65.
- KIKUCHI, A. (菊地朗). 1983. "Control and Phrase Structure," *Exploration in English Linguistics* 2, pp. 32-48.
- NAKAJIMA, H. (中島平三). 1984. 『英語の移動現象研究』 Tokyo: Kenkyu-sha.
- NISHIGAUCHI, T. (西垣内泰介). 1984. "Control and the Thematic Domain," *Language* 60, pp. 215-250.
- OHYE, S. (大江三郎). 1983. 『助詞 (II)』 Tokyo: Kenkyu-sha.
- QUIRK, R., S. GREENBAUM, G. LEECH, and J. SVARTVIK. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- THOMPSON, S. A. 1973. "On Subjectless Gerunds in English," *Foundations of Language* 9, pp. 373-383.

(1986年5月23日 受理)